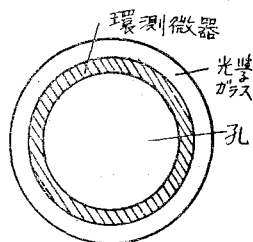


経緯儀で出来る測微観測 (1)

稲 葉 通 義

星空の美を味ふには肉眼でもよいが、望遠鏡を用ふると、又た違つた星の美しさを楽しむ事が出来る。色取りどりの星、配置の妙を極めた星團など、一つ一つを小望遠鏡の視野に追ふのは愉快の限りである。併し小型望遠鏡で有効な天體観測をするとなると、そう簡単にはゆかない。殊に赤道儀式据付けでなければ出来ない事が多く、たとへ出来ても労力が倍以上必要なのが普通である。然るに、彗星や小遊星などの精密な位置を測定する測微器で経緯儀式据付けでも立派に使用出来るものがある。それはリング・マイクロメータ(環測微器)と呼ばれるもので、構造も誠に簡単、従つて星の美を楽しむ序に、一寸彗星の位置でも測らうかと言つた手輕るさで、立派な観測が出来るわけである。しかもその精度は、普通の運轉時計付赤道儀のカメラに依る寫眞観測などよりも、むしろよい結果が得られる。以下之のリング・マイクロメータの構造や使用法を御紹介しよう。

構造は甚だ簡単で單に環狀の金屬板を第1圖の様に、中央に穴のある光學ガラスに貼付すればよい。只之の金屬板の内側(出来れば外側も)を正しい圓にしなければならぬ。これを接眼並に對物レンズの焦點に裝置すればよいだけである。こんな簡単な測微器は物理學者などは想像も出来ないもので、天文のみに與へられた特權(?)であり、之の測微器の構造の中には地球の自轉といふ精密時計仕掛が取り入れられてゐるわけである。

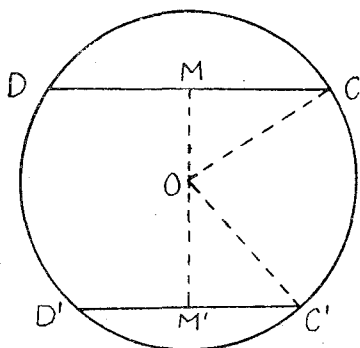


第 1 圖

扱て観測に當つては環の半径(r)が知れて居らねばならぬ。そこで準備観測として、先づ之の半径の測定法を述べよう。

先づ環測微器を接眼鏡の焦點に固定し、之れで星に焦點を合せば環は對物レンズの焦點に入る。こうしておいて、相互に近く並んでゐる2星が、丁度環を横切る様に望遠鏡を、その少し西側に向けて固定する。そして2星が、環から現はれる時刻及び隠れる時刻をクロノメータで読み取る。即ち圖示すると、第

2圖に於いて、圓は環の内側を示し、弦 CD は一つの星（位置を a, δ とす）の通る路で、C に現はれた時刻を t_1 , D に隠れた時刻を t_2 とする。同様に、 $C'D'$ は他の星 (a', δ') の経路で、C', D' に於ける時刻を 夫々 t'_1, t'_2 とする。環の中心 O より兩弦へ垂線 MM' を引く。



第 2 圖

今、 $OC=r$ $OC'=r$

$$\angle COM = \gamma \quad \angle C'OM' = \gamma'$$

とすると、 $CM = r \sin \gamma$ $C'M' = r \sin \gamma'$

$$OM = r \cos \gamma \quad OM' = r \cos \gamma'$$

となる。そこで、 $MM' = r(\cos \gamma' + \cos \gamma) = 2r \cos \frac{1}{2}(\gamma' + \gamma) \cos \frac{1}{2}(\gamma' - \gamma)$

$$C'M' + CM = r(\sin \gamma' + \sin \gamma) = 2r \sin \frac{1}{2}(\gamma' + \gamma) \cos \frac{1}{2}(\gamma' - \gamma)$$

$$C'M' - CM = r(\sin \gamma' - \sin \gamma) = 2r \cos \frac{1}{2}(\gamma' + \gamma) \sin \frac{1}{2}(\gamma' - \gamma)$$

と書き換へることが出来る。然るに今觀測をした 2 星の位置が分つてゐるのだから、次の事が數量的に知られる。

$$MM' = \delta' - \delta \quad CM = \frac{15}{2}(t_2 - t_1) \cos \delta \quad C'M' = \frac{15}{2}(t'_2 - t'_1) \cos \delta'$$

之れ等と前の 3 式とから

$$\tan \frac{1}{2}(\gamma' + \gamma) = \frac{C'M' + CM}{MM'} = \frac{\frac{15}{2}(t'_2 - t'_1) \cos \delta' + \frac{15}{2}(t_2 - t_1) \cos \delta}{\delta' - \delta} \dots \dots (1)$$

$$\tan \frac{1}{2}(\gamma' - \gamma) = \frac{C'M' - CM}{MM'} = \frac{\frac{15}{2}(t'_2 - t'_1) \cos \delta' - \frac{15}{2}(t_2 - t_1) \cos \delta}{\delta' - \delta} \dots \dots (2)$$

$$r = \frac{MM'}{2 \cos \frac{1}{2}(\gamma' + \gamma) \cos \frac{1}{2}(\gamma' - \gamma)} = \frac{\delta' - \delta}{2 \cos \frac{1}{2}(\gamma' + \gamma) \cos \frac{1}{2}(\gamma' - \gamma)} \dots (3)$$

式で表はすと甚だ面倒の様であるが、實際の計算はそれ程ではない。後で例を示そう。尚ほ更に嚴密に言へば、補正事項として大氣の屈折及び経路の曲率 (CD や $C'D'$ が眞の直線でない) を考へに入れねばならぬが、子午線近くで觀測すれば赤經の大氣の屈折は考へなくてよく、且つ赤道に近い星を撰べば曲率の補正も不用となる。只子午線附近の赤緯の大氣の屈折を補正しようと思へば次の表で十分である。表中 Z は天頂距離である。星の赤緯差から大氣の屈折

の量を引けば見掛けの赤緯差が得られる。

次に、使用するクロノメータが恒星時であれば問題はないが、平均太陽時であるならば、 $t_2 - t_1$ 及び $t_2 - t_1$ なる時間は恒星時間に換算しなければならぬ。

大 気 の 屈 折 の 表

赤 緯 差	$Z=0^\circ$	$Z=10^\circ$	$Z=20^\circ$	$Z=25^\circ$	$Z=30^\circ$	$Z=35^\circ$
0'	0."00	0."00	0."00	0."00	0."00	0."00
2	0.03	0.03	0.04	0.04	0.05	0.05
4	0.07	0.07	0.08	0.08	0.09	0.10
6	0.10	0.10	0.11	0.12	0.14	0.15
8	0.13	0.14	0.15	0.16	0.18	0.20
10	0.17	0.17	0.19	0.21	0.22	0.25
12	0.20	0.21	0.23	0.25	0.27	0.30
14	0.24	0.24	0.27	0.29	0.32	0.35
16	0.27	0.28	0.31	0.33	0.36	0.40
18	0.30	0.31	0.34	0.37	0.40	0.45
20	0.34	0.35	0.38	0.41	0.45	0.50
22	0.37	0.38	0.42	0.45	0.50	0.55
24	0.40	0.42	0.46	0.49	0.54	0.60

実際の計算を例に依つて示す方が判り易いので、平均太陽時のクロノメータを用ゐて環の半径 r を測定する計算例を示す。

先づ撰んだ星の赤緯と観測せる時刻を夫々

$$\begin{array}{lll} \delta = 3^\circ 25' 13.''3 & t_1 = 22^h 26^m 14^s 5 & t_1 = 22^h 33^m 28^s 5 \\ \delta' = 3^\circ 43' 38.1 & t_2 = 22^\circ 28' 36.0 & t_2 = 22^\circ 36' 17.5 \end{array}$$

とすると $\delta' - \delta = 18' 24.''8$ 。大気屈折補正として天頂距離 31.5 、赤緯差 $18'$ 餘りであるから $0.''4$ を引けばよいから、求むる $\delta' - \delta = 18' 24.''4 = 1104.''4$

$$t_2 - t_1 = 2^m 49^s 0 \quad t_2 - t_1 = 2^m 21^s 5$$

之等は平均太陽時間であるから恒星時間になほすと、

$$t_2 - t_1 = 2^m 49^s 5 = 169^s 5 \quad t_2 - t_1 = 2^m 21^s 9 = 141^s 9$$

(つづく)

正 誤. 3月號第156頁, 流星課だより(79)の観測表中, 堀口泰生氏とあるのは堀田泰生氏の誤り。